



障がいと向き合い 一歩踏み出したその先に

ROAD

輝く人たち No.22

コ

ツコツと白杖をつきながら、アクティブに行動する女性がいま

す。砂川順枝さん(69)。
砂川さんは網膜萎縮という進行性の目の病気を患い、現在、右目には視力が無く、左目に残ったわずかな視力を頼りに生活しています。そんな状況でもふさぐことなく図書館ボランティアやカーミーゾーの里浜保全活動のボランティア、折り紙サークルに参加するなどその好奇心は留まることをしりません。

今でこそ好奇心旺盛にいろいろなことにチャレンジしている明るい砂川さんですが、数年前までは何の目的も持たずに家にひきこもっていたことがありました。原因は母親の死のショックから目の病気を患い、自分が障がい者



① だこ市民大学で、地域再発見のため史跡や湧き水を巡る。② 子どもたちに折り紙を教えたいと参加している折り紙サークル

になつてしまった」という現実を受け止められないことからくるものでした。「自分のことよりも母親の介護を優先する毎日で、たくさん母親の時間母親といました。その母親が亡くなったことがショックで、高熱を出したことに

よる目の異変が今に至ります」。
病気を患う前からボランティアに熱心だった砂川さんは、引きこもった状況が続く中で、ある時浦添市社会福祉協議会に赴きます。その時ボランティア仲間などから勧められ、白杖を使った歩行訓練や点字など、障がいを抱えながら生活していくために必要な訓練を行う、NPO法人ロービジョンライフ沖縄(那覇市繁多川)に通うことを決心します。

「自分が障がい者という不安から外へ

一歩踏み出す勇氣がありませんでした。でも、目が悪いからと言って引きこもっていたら足も悪くなってしまふ。そうはなりたくない。それは葛藤の末に踏み出した砂川さんにとって大きな第一歩でした。

自分以外の視覚障がいを抱えた人たちと接した砂川さんは、そこで障がいの多種多様さを知りました。しっかりと前を向いて生きている姿を目の当たりにして、「自分は何をやっていったんだろう」と障がいと向き合うことができたと言います。また、その頃に出会ったある全盲の女性から「浦添は福祉のまちなんですよね?」「ようどれほどなんですか?」「どう質問されたことが、その後の砂川さんの生き方を大きく変えることになりました。「正直ドキッとしました。若い時から浦添にいるのにも関わらず、浦添のことを全く知らない自分がいることに気づきました」。

そのことをきっかけに以前から耳にしていた浦添市でだこ市民大学に入学しようと決意した砂川さん。第8期生(平成28年度)として入学し、浦添市の歴史や文化、防災など2年間に渡り様々なことを学びました。「自分一人では何もできませんでした。多くの学びがあったのはもちろんですが、素敵な仲間と出会えたのは私にとって何よりの宝です」と笑顔見せます。かけが

えない仲間を得た砂川さんは、卒業後も定期的に仲間と共にボランティアに行くなどその絆を深めています。

そんな砂川さんには夢があります。それは組踊のすばらしさを視覚障がいがある人のためにガイドをすることだと言います。「私だからこそ伝えられることがある。紅型の美しさや所作の意味など私なりに伝えていきたい。目下勉強中です」と胸を張ります。

障がいと向き合い挑戦を続ける砂川さんの好奇心は無限に広がっています。今後も砂川さんの挑戦から目が離せません。

PROFILE

砂川 順枝(69)

名護市出身。20代で浦添市に移り住む。幼いころから弱視で、約10年前に中途障がいを抱える。一番のお気に入りスポットは当山の石畳道。そこを流れる牧港川のせせらぎに心癒されるという。座右の銘は「塞翁が馬」人生の幸不幸は予測できないもの。今を精一杯生きてみたいと語る。

